



平成 29 年 11 月 8 日(水) 手稲郷土史研究会定例会講演要旨

## 札幌市内の埋蔵文化財 ～発掘された遺跡から～

札幌市埋蔵文化財センター

文化財調査員 藤井 誠二氏

前回、「埋蔵文化財とは？」から、札幌の地質と地形、埋蔵文化財センターの仕事、時代区分の話、市内全体の遺跡分布、そして手稲区の遺跡の話をしました。今回は、札幌市内で発掘された遺跡の中から、この遺跡だけは知っておいて欲しいという、言わば札幌の代表的な遺跡を紹介したいと思います。



### 発掘された札幌の遺跡

市内で発掘された遺跡から、縄文、続縄文、擦文文化の遺跡を5か所ほど紹介します。まずは、縄文晩期から続縄文初頭の時期の札幌を考えるうえで非常に重要なポイントとなる3遺跡から見ていきたいと思います。

#### (1) N30 遺跡：縄文後～晩期、続縄文、擦文

N30 遺跡は、西区二十四軒 4 条 1 丁目にあります。平成 7～8 年、北海道職業能力開発促進センターの建設に先立って発掘調査が行われました。この遺跡では、縄文後～晩期の遺構・遺物がたくさん見つかりました。特に縄文晩期の地層からは、竪穴住居跡や土坑墓、たくさんのたき火跡とともに、大量の土器・石器などが見つかっています。N30 遺跡(1 次調査)の発掘で見つかったものは、この時期の生活の様子 が極めて良好に知りえる重要な資料であるとして、平成 16 年に札幌市指定有形文化財に指定されました。指定された資料は、発掘調査報告書に掲載されたたくさんの土器・石器のほか、土偶や石製装飾品、土坑墓に副葬されたサメの歯なども含まれています。また、平成 15 年には、1 調査地区の東側で有料老人ホームの建設に伴って 2 次調査が行われ、続縄文文化の竪穴住居跡やたくさんの土器・石器、擦文文化の竪穴住居跡や擦文土器などが見つかっています。



写真 1 N30

遺跡出土土器(縄文後期)

#### (2) H508 遺跡(通称：丘珠縄文遺跡)：縄文晩期～続縄文初頭

H508 遺跡は、東区丘珠町のサッポロさとらんど内にあります。遺跡は、サッポロさとらんどの造成に先立って、平成 4・5 年に行った試掘調査で発見されました。さとらんど内には、H508 遺跡のほか、H317 遺跡、H509 遺跡という三つの遺跡があり、このうち H317 遺跡は、ミルクの郷の建設に先立って発掘調査が行われています。

H317 遺跡の調査では、続縄文文化の遺構・遺物と擦文文化の遺構・遺物が見つかっています。

H509 遺跡は、続縄文文化の小規模な遺跡で、H508 遺跡同様、今も地中に保存されています。

H508 遺跡は、縄文晩期～続縄文初頭の遺跡で、広範囲にわたり地中にそのままの状態で見保されていることから、この遺跡を整備・活用する事業が進められています。

この事業に伴って、平成 25・26 年に遺跡の一部を発掘する確認調査が行われました。調査の結果、縄文晩期から続縄文初頭の遺構・遺物が大量に見つかりました。遺構では、たき火跡がたくさん見つかりましたが、竪穴住居跡は見つかっていないことから、集落跡ではなく、当時の人々が繰り返しこの場所を訪れ、いわゆる生業活動が盛んに行われた遺跡だったと考えられています。市内の縄文遺跡としては、極めて異例な立地条件の遺跡であり、低地利用の先駆けの遺跡とも言えるでしょう。



写真2 丘珠縄文遺跡遠景（縄文～続縄文）

### （3）H37 遺跡：続縄文、擦文

H37 遺跡は、東区栄町丘珠空港内の道警ヘリポート造成と札幌市スポーツ交流施設「つどーむ」の建設に先立って平成 5～8 年に発掘調査が行われました。つどーむの調査では、続縄文文化と擦文文化、道警ヘリポートの調査では、続縄文の遺構・遺物が見つかりました。特に道警ヘリポートの調査では、続縄文文化の竪穴住居跡が見つかり、同時期の生活・生業形態を考えるうえで、N30 遺跡やH508 遺跡とともに極めて重要なカギを握る遺跡と見ています。例えばですが、N30 遺跡やH37 遺跡などを主要な生活拠点として、丘珠縄文遺跡を生業活動の拠点として、その行動ルートを描けるのではないかと



写真3 H37 遺跡竪穴住居跡（続縄文）

居跡（続縄文）

### （4）K135 遺跡：続縄文

K135 遺跡は、JR札幌駅の地下にありました。昭和 59 年と 60 年に、線路の高架化に伴って発掘調査が行われました。K135 遺跡では、続縄文後半の遺構・遺物が大量に見つかり、また、東北の弥生文化の遺物や北のオホーツク文化の遺物なども発見されており、当時から札幌という土地が南北の文化の交流拠点だったことが明らかになったという意味でも非常に重要な遺跡だと言えます。この遺跡では、竪穴住居跡は見つかりませんが、多くのたき火跡が見つかり、そのたき火跡の土の中からは大量の焼けたサケの骨が見つかりました。遺跡内では、埋没した河川の跡も確認されており、河川でのサケ漁が盛んに行われていたことがわかりました。K135 遺跡は、市内では続縄文後半期の最大級の遺跡と言えます。なお、埋蔵文化財センターの展示室では、K135 遺跡をモデルに当時の生活の様子を復元したジオラマを展示しているので、機会があればぜひ来館していただければと思います



写真4 K135 遺跡土器出土状況（続縄文）

### （5）K39 遺跡（第 6 次調査）：続縄文、擦文、アイヌ文化期

K39 遺跡は、北海道大学の敷地を含む広大な範囲にわたります。この中で、環状通エルムトンネルの建設に先立って行われた発掘調査が第 6 次調査地点になります。調査は、平成 8～11 年に行われました。K39 遺跡第 6 次調査地点は擦文文化が主体の遺跡で、擦文期の初頭から末期にわたる 6

枚の文化層が確認されました。市内の擦文期の遺跡では複数の文化層が検出される遺跡は珍しくありませんが、擦文期全体を通してほぼ途切れることなく遺構・遺物が見つかる遺跡は稀有な遺跡と言って良いでしょう。また、この調査地点では埋没河川の中も調査しており、河川内からは大量の木製品が見つかりました。擦文期の木製品が出土したこと自体が非常に珍しいことですが、河川内でも層位的に調査が進められ、各時期の住居跡(文化層)に対比できる木製品が出土したことは特筆できます



写真 5 K39 遺跡第 6 次調査地点(擦文)

## 遺跡の分布から見た札幌

前回、札幌の遺跡のおおまかな分布傾向として、台地・丘陵など標高の高いところに縄文の遺跡が多く、標高が低くなるにつれて続縄文以降の比較的新しい時期の遺跡が多くなるという話をしました。今回は、実際に時期別の分布図を用意しました。

**旧石器文化～縄文文化**：寒冷期から温暖期へ移り変わる中で、海が現在の札幌北部低地に湾入し、縄文時代中期以降、人々は丘陵・台地や砂丘上などに生活圏を展開していました。

**縄文文化～続縄文文化**：温暖期から再び寒冷期へ移り変わっていく中で、海岸線は後退していきました。環境の変化に伴って低い土地が乾いていくと、人々も河川に沿って北部低地へと生活圏を拡大していくようになりました。**続縄文文化～擦文文化**：この頃からすでに札幌は北海道の中心であり、南北・海陸交流の拠点、鮭の好漁場として、「まち」や農業を支える基盤が形づくられていきました。**擦文文化～アイヌ文化期**：本州の生活様式や文化に強い影響を受けて成立した擦文文化も、やがて竪穴住居や土器を使用しなくなり、アイヌ文化へと変容していきました。近現代：北海道開拓期、高度成長期を経て、現在の巨大都市札幌へと成長しました。

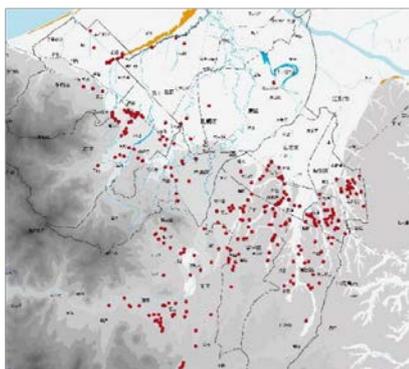


図 1 縄文の遺跡分布

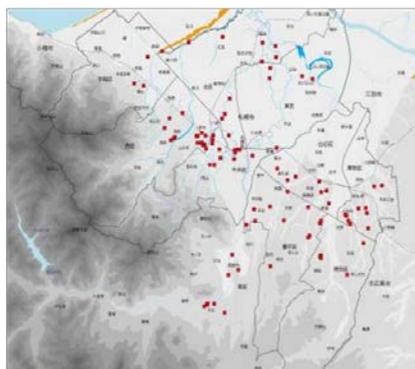


図 2 続縄文の遺跡分布

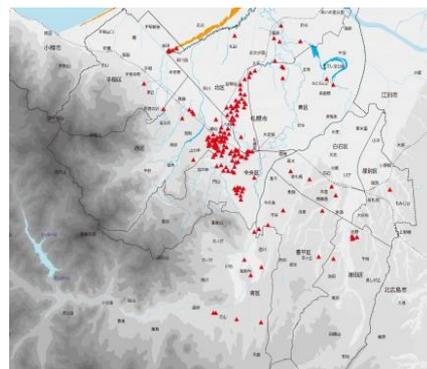


図 3 擦文の遺跡分布

今回紹介した遺跡は、札幌市内に限らず、道内外で見ても、いずれも重要な遺跡と言えますので、ぜひ覚えておいていただければ幸いです。

平成 29 年 11 月 11 日 (土) 札幌市・手稲町合併 50 周年記念講演会 (手稲区民ホール)

主催者挨拶

## 手稲の郷土を語り継いで

～地域の未来のために、残したいこと・伝えたいこと～

手稲郷土史研究会 会長 茂内 義雄

ひとことご挨拶申し上げます。

本日は「札幌市・手稲町合併 50 周年記念公園会」にこのように多数お集まり頂きました。大変な悪天候の中、手稲区内外、そしてお隣の石狩市郷土研究会の皆様おいでくださいました。ありがとうございます。

この記念すべき年にたくさんのご支援のもと、私たち手稲郷土史研究会は三つのイベント事業を企画しました。その一つに「手稲記念館収蔵品移動展示会」を開きました。と言いますのは、私たち手稲村役場時代からの数々の資料、もう歴史的遺産ですが現在西区西町にあります「手稲記念館」に大事に保存されています。

かつては手稲の資料館でした。札幌市の分区による手稲区と西区という線引きで今は西区宮の沢にあるのです。

今回手稲記念館並びに所管の札幌市文化財課のご英断のもと、50 年目にして初めて館外への貸し出しが許されました。いい意味でのふるさとへの里帰りがなされたという気持ちです。感激です。

併せて、手稲と深いかわりのある白石区「郷土館」から明治維新後の開拓使のお役人（松本十郎判官の掛軸と西区山の手にあります「手稲博物館」からは、この手稲山の地中深く眠る【手稲石】をお借りしました。いよいよ今日明日でお返しします。

このあとステージにあります演題のとおり、北海道博物館学芸主幹三浦泰之先生のご講演がございます。先生のご経歴はプロフィールのように北海道史のご講演でお忙しく活躍されています。

来年は北海道 150 年祭ということもありまして松浦武四郎関係事業にも関わっています。今日は、私たちの先祖が大変な難儀をしながら国元を発って海を渡ってきた、そうしたルーツ調べも教えて頂けるのではないかと思います。よろしくお願いします。言葉足らずですが、開会の挨拶とします。



「手稲の郷土史を語り継いで」  
手稲郷土史研究会会長 茂内 義雄

### 次回定例会予定

#### 部外講演

H30 年 1 月 10 日(水)

#### 子供時代の手稲の思い出

手稲中央小学校・手稲中学校出身  
中山 幹男様  
手稲区民センター会議室 3F

# 北海道の開拓と士族移住

北海道博物館 学芸主幹 三浦 泰之氏

## 北海道開拓の歴史をたどる

明治新政府は、明治2年に開拓使を置き、「蝦夷地」から「北海道」に改めた。石狩の国札幌郡というように11の国と86の郡を設けた。これが開道150年の根拠である。

政府が北海道開拓に力をいれたのは、ロシアとの国境問題の危機感と未開地の豊富な資源の活用が重要な課題であった。

北海道は欧米の文化・技術を積極的に導入して開拓を進めようとした。米国の農務長官ケブロンを招いて札幌を北海道開拓の中心地にしようと

進める。原野を切り開き、広い道路に洋風の建物が立ち並ぶ街が10数年のうちにできあがっていく。開拓使が行った事業として道路や鉄道の交通網の整備がある。その他農産物や家畜の資源を生かした缶詰工場・製材工場など、特にサッポロビール工場は有名である。開拓のための優れた人材育成のため札幌農学校をつくった。開拓のための移住者を募るのであるが、初めのうちは北海道へ来るための経費や当面の生活費を支給するという手厚い保護をするがなかなかうまくいかなかった。



## 北海道開拓と士族移住

明治初期移住の主力をなしたのは、明治維新の混乱で失業するなどして、移住を余儀なくされた武士たち。武士としても面目を保つために、旧主君との主従の団結を心の支えにするなどして、新天地に活路を見出そうとした。分割分領政策で北海道を分割し旧藩に割り当て開拓を期待したが、積極的に取り組む藩もあったが、すぐに手を引く藩も多かった。士族だけでなく庶民であっても志のあるものには相応の土地を与えた。明治20年代以降、北海道庁による拓殖政策のもと、移住者の数は急増していく。

## さまざまな士族移住

明治新政府による分割分領政策と士族移住

- ・旧仙台藩主の主従 戊辰戦争で大幅に減禄 巨理～伊達邦成（伊達）岩国山～伊達邦直（当別）角田～石川邦光（室蘭）白石～片倉邦憲（第一陣幌別・第二陣登別・第三陣白石・手稲）
- ・旧会津藩士 斗南藩～兵部省管轄下の「会津降伏人」余市町にてリンゴづくりで成功を収める。

士族屯田

- ・明治8年に琴似に240戸入植が始まり。道内37か所 家族を含めて4万人に及んだ。

秩禄処分後の出資による士族授事業としての開拓～旧名古屋藩徳川家（八雲・熊彫で有名）

- ・華族などからの出資で設立した会社組織による開拓～旧名古屋藩士族林頼三（前田家も出資）

旧藩主家による大規模農場の経営も行なわれた。（前田農場はこの範疇か）

- ・移住士族取扱規則による士族移住～国が330円を運営資金として貸し付ける制度もあった。

## 武士としての由緒と古文書

・古文書の北海道的特徴～旧主君からの印判状・知行宛行状・免許状などが主。そのような古文書を携えて移住し、保管し続ける行為には自らの「由緒」に対する「誇り」を保ち続ける決意が反映されている。郷里の地名や伝統文化が今も受け継がれているのは、移住者の郷里に対する熱い心情を雄弁に物語っている。

一時間半にわたる濃密な講演を限られた紙面にまとめることは不可能ですが、印象に残った部分を拾い集めて綴りました。（文責：永井）